



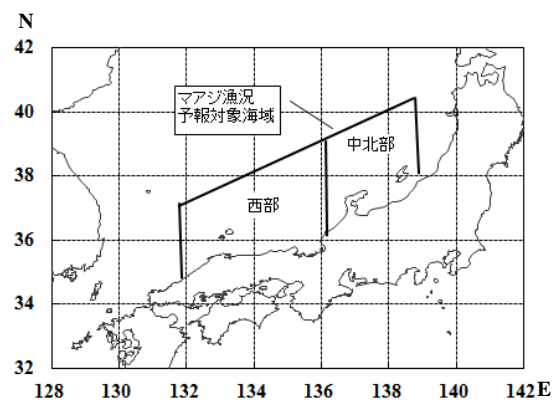
平成28年度 日本海マアジ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し（平成28年5月～9月）のポイント

- ・ 日本海西部及び日本海中北部の来遊量は前年を下回る

西部（島根県～福井県）
中北部（石川県～新潟県）



※「前年」は2015（平成27）年5月～9月

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所

担当：業務推進部 加藤、江連

担当：資源管理部 上原、松倉

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0850

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成 28 年度 日本海マアジ長期漁況予報

今後の見通し（2016（平成 28）年 5 月～9 月）

対象海域：日本海（西部：島根県～福井県、中北部：石川県～新潟県）

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0 歳魚（2016 年級群）、1 歳魚（2015 年級群）、2 歳魚（2014 年級群）

- (1) 西部は 1 歳魚が主体で、夏以降は 0 歳魚の割合が増加し、全体の来遊量は前年を下回る。
- (2) 中北部は 0 歳魚と 1 歳魚が中心で、来遊量は前年を下回る。

※「前年」は 2015（平成 27）年 5 月～9 月を示す。

I 資源状態、漁況の経過（2015 年 4 月～2016 年 3 月）及び海洋環境について

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジ対馬暖流系群の資源量は、1970 年代後半に低位水準であったが、1980 年代・1990 年代前半に増加し、1993 年～1998 年には 50 万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999 年～2002 年には 30～40 万トンだったが、2003 年、2004 年には増加し、再び 50 万トンを超えた。2005 年以降は 40 万トン前後で推移している。

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系群の一部であり、その動向は同系群の資源状態と密接に関わっている。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北部、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0 歳魚として対馬暖流に沿って能登半島以北に分布を広げる。越年して 1 歳魚になると、春季に九州西・北部から日本海西部で漁場を形成し、その後中北部に分布を広げる。その後は地付き群として中北部で漁場を形成する他、東シナ海に移動して漁獲される群もいると考えられる。

2. 漁況の経過

2015 年度（2015 年 4 月～2016 年 3 月）における島根県～新潟県の主要港における水揚げ量は 30 千トン（各府県の速報値等の集計による）であり、近年（2010 年～2014 年度）の平均（39 千トン）及び 2014 年度（2014 年 4 月～2015 年 3 月、44 千トン）を下回った（図 1）。

日本海のマアジは主にまき網と定置網によって漁獲されている。しかし、定置網の占

める割合は概ね 20%以下で、まき網の漁獲量の多寡が全漁獲量に大きく影響している(図 2)。2015 年度におけるまき網の漁獲量は 4 月、5 月及び 12 月～2 月に 2014 年度を上回ったが、それ以外の 6 月～11 月及び 3 月に 2014 年度を大きく下回った(図 3)。また、2015 年度のまき網による年間漁獲量は、2014 年度及び近年(2010 年度～2014 年度の平均)を下回った。一方、2015 年度の定置網による漁獲量は、4 月～6 月に 2014 年度を上回り、年間漁獲量も 2014 年度及び近年(2010 年度～2014 年度の平均)を上回った(図 3)。

2015 年度の西部の漁獲量(まき網が中心)は、5 月に 2014 年度を大きく上回ったが、全般的に好調だった 2014 年度を下回った。中北部の漁獲量(定置網が中心)は、2014 年度と同程度の月が多く、7 月は 2014 年度を大きく下回ったが、2 月以降は大きく上回った(図 4)。このようにマアジの漁況はまき網中心の西部では 2014 年度を下回り全般的に低調であったが、定置網中心の中北部で 2014 年を上回った。

3. 海洋環境

日本海のマアジの来遊量は、中長期的に対馬暖流域の水温変動と正の対応関係が見られる。期間中 6 月までの対馬暖流域の 50m 深水温は平年並みで経過すると予想されており(平成 28 年度第 1 回日本海海況予報、日本海区水産研究所)、海洋環境から受けるマアジ漁況への影響は少ないと思われる。

II 今後の見通しについて

1. 0 歳魚(2016 年級群)

例年では、今後の日本海西部における漁獲の主体は 1 歳魚(2015 年級群)で、初夏以降 0 歳魚(2016 年級群)の割合が高くなる。しかし、今年は 0 歳魚の資源量指標値の一つとなっている 4 月半ばの好適水温帯面積(東シナ海における着底稚魚の分布量と高い相関が見られる)が前年を大きく下回った(平成 27 年度第 2 回対馬暖流系マアジ・さば類・イワシ類長期漁海況予報、西海区水産研究所)。このことから、2016 年級群は 2015 年級群の豊度を下回ると推測される。

2. 1 歳魚(2015 年級群)及び 2 歳魚(2014 年級群)

2015 年 5 月～7 月に日本海西部で実施した表中層トロール調査によるマアジ稚魚の採集数と水温分布から 2015 年級群の加入量指数を算出した(図 5)。2015 年級群の加入量指数は過去最高であった 2014 年級群を大きく下回り、2011、2012 年級群と同程度であっ

た（平成 27 年度日本海さば類・マアジ・マイワシ・ブリ長期漁況予報、日本海区水産研究所）。2015 年度（2015 年 4 月～2016 年 3 月）のまき網による 2015 年級群の漁況は低調であり、2015 年級群の豊度は 2014 年級群を下回ると考えられる。一方、昨年の資源評価結果及び漁況の推移から、2014 年級群の豊度は 2013 年級群を上回ると考えられる。

3. 今期の来遊量

以上から、日本海西部・中北部海域のマアジ来遊量は、0 歳魚（2016 年級群）及び 1 歳魚（2015 年級群）が前年を下回り、2 歳魚（2014 年級群）が前年を上回ると予測される。全体として前年を下回ると予測される。

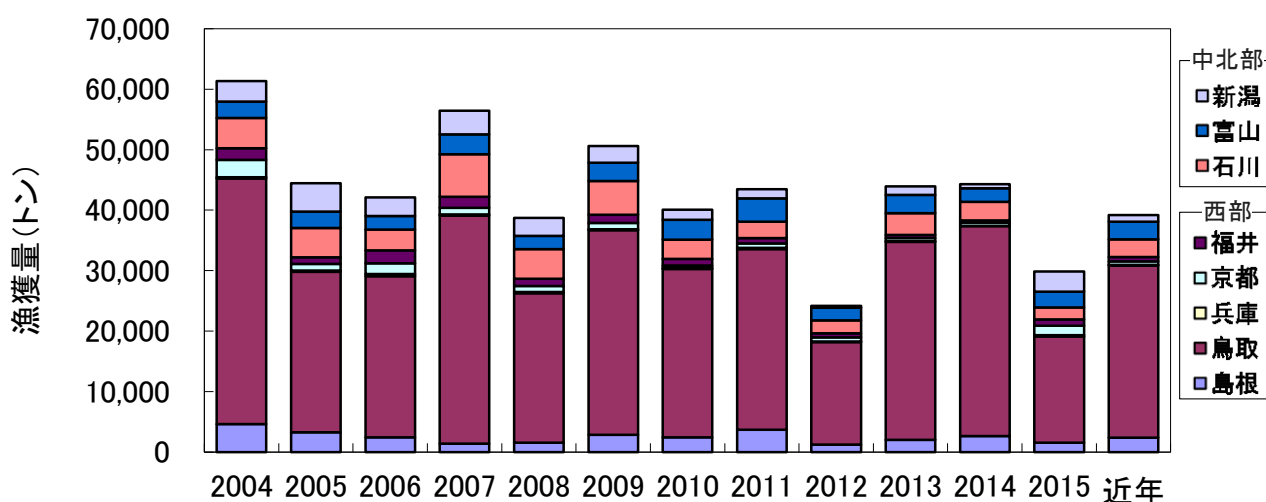


図 1 日本海主要港（島根県～新潟県）の水揚げ量の推移（漁期年度の 4 月～翌年 3 月）近年は 2010 年～2014 年度の平均値を示す

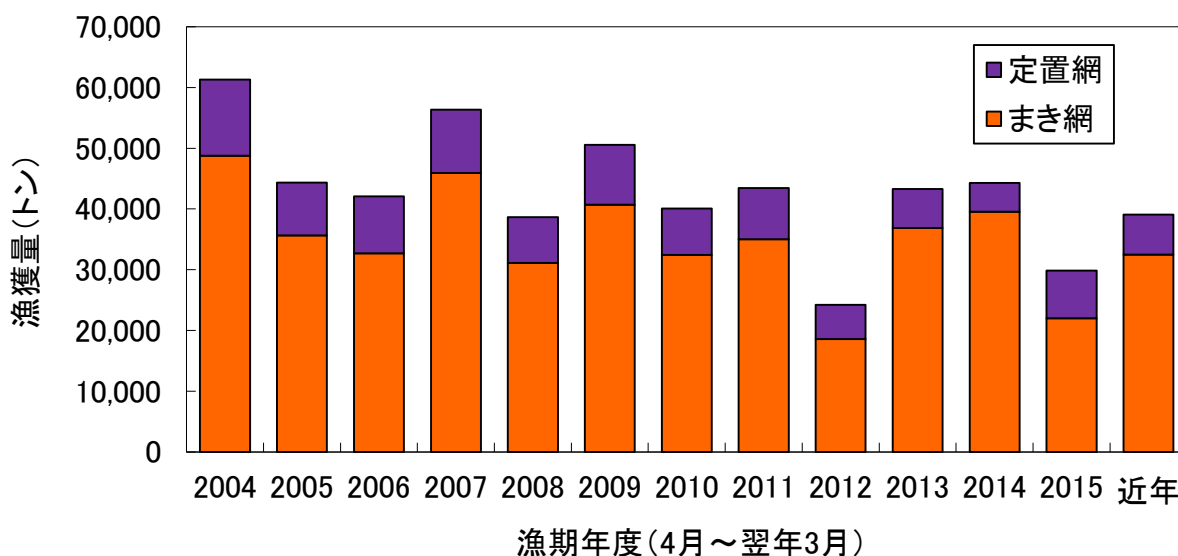


図 2 漁業種類別漁獲量の経年変化（漁期年度は 4 月～翌年 3 月）近年は 2010 年～2014 年度の平均値を示す

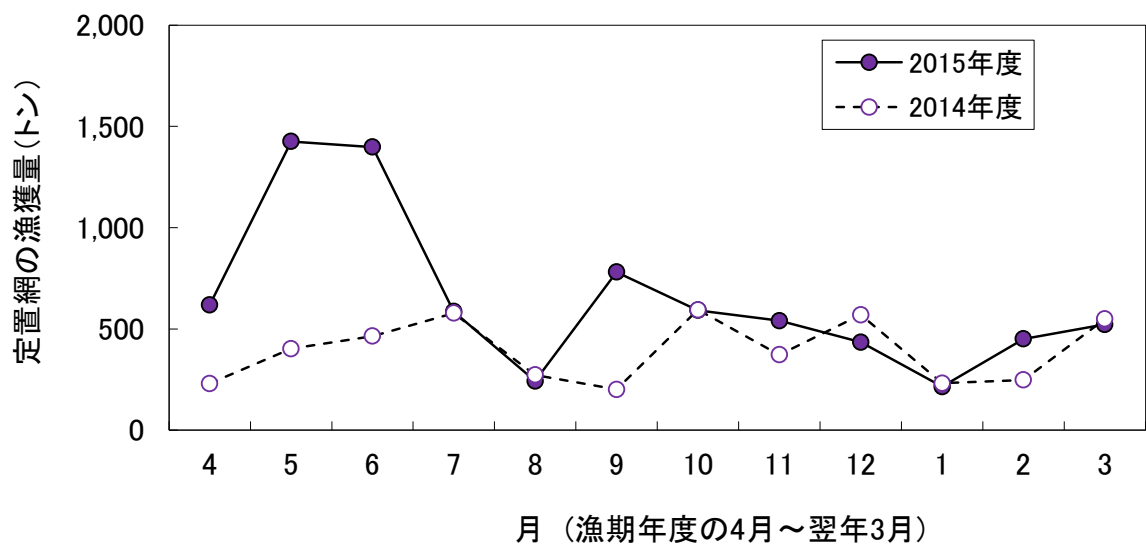
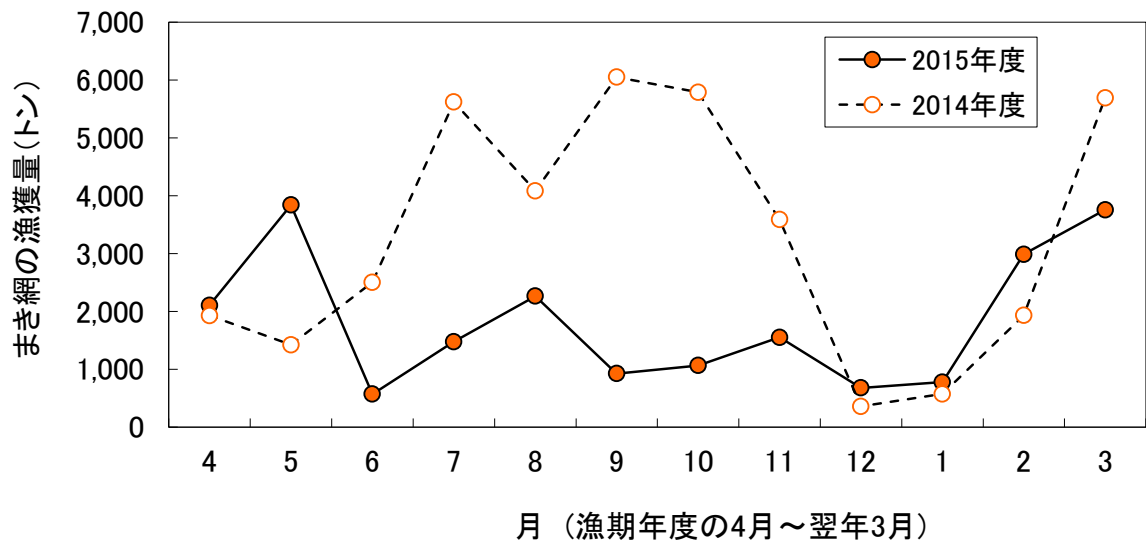


図3 漁業種類別漁獲量の経月変化 (上はまき網、下は定置網)

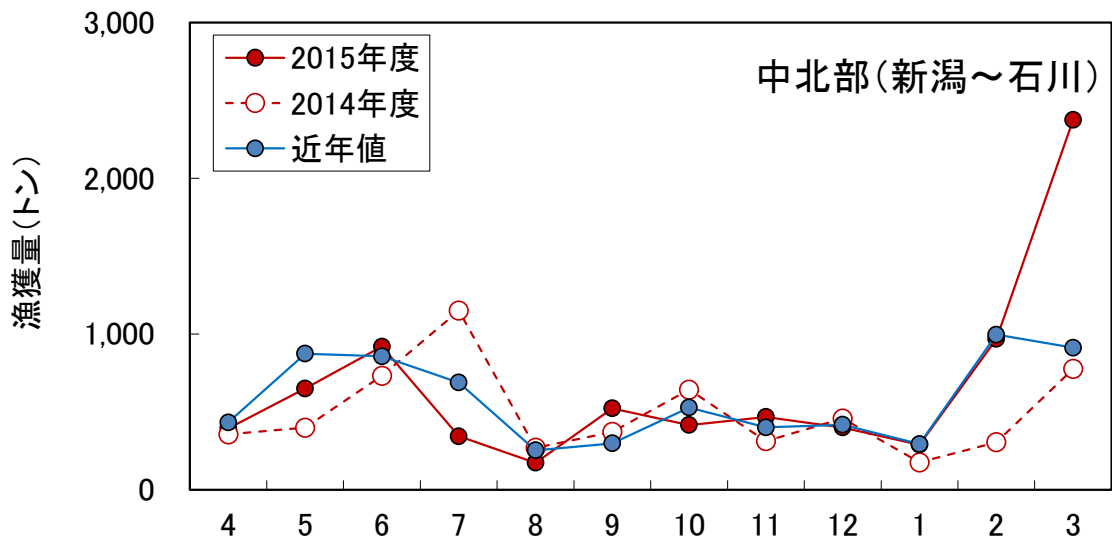
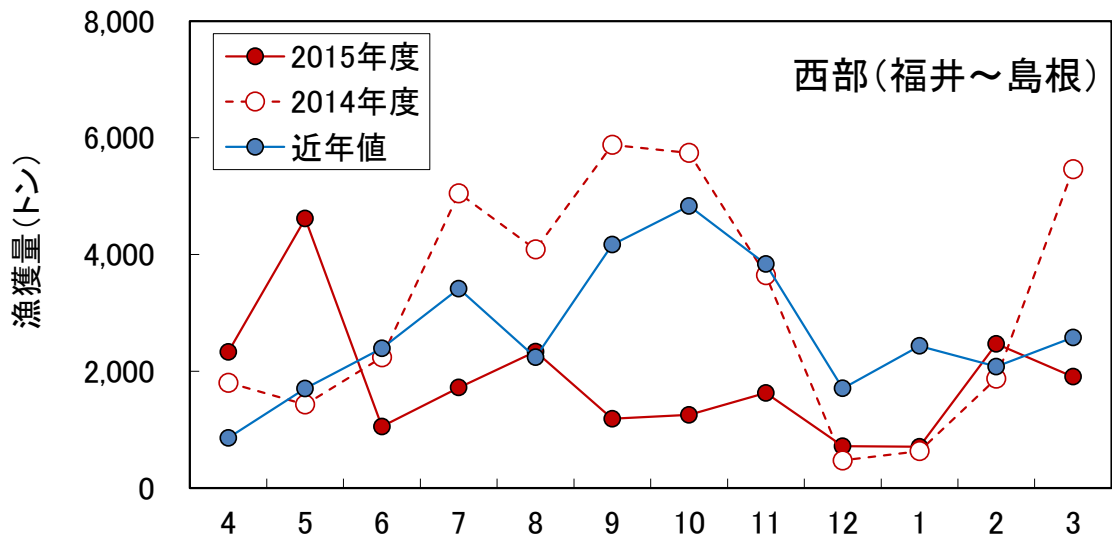
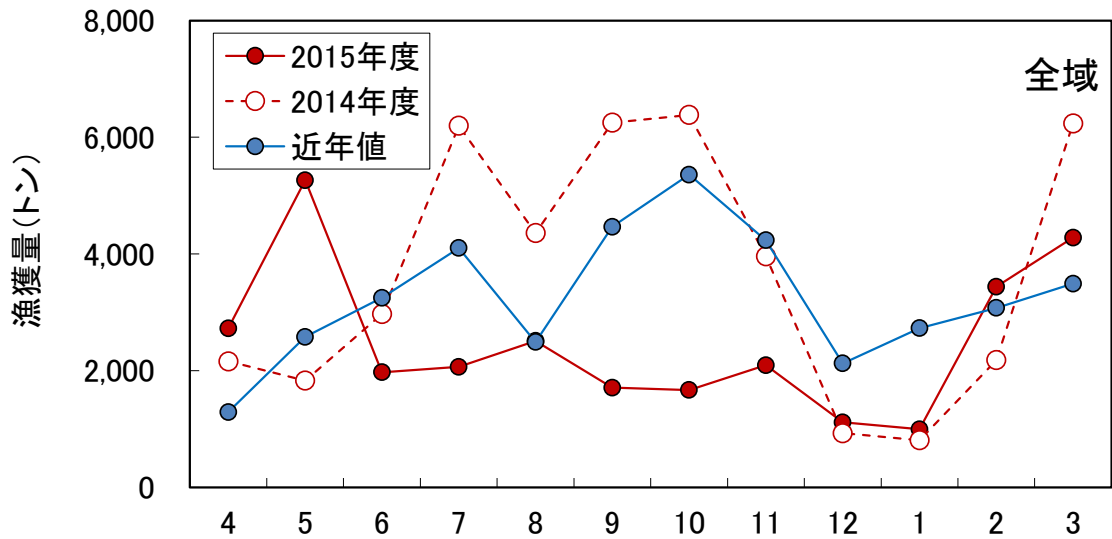


図4 海域別日本海主要港への水揚げの経月変化
近年値は2010年~2014年度の平均値を示す

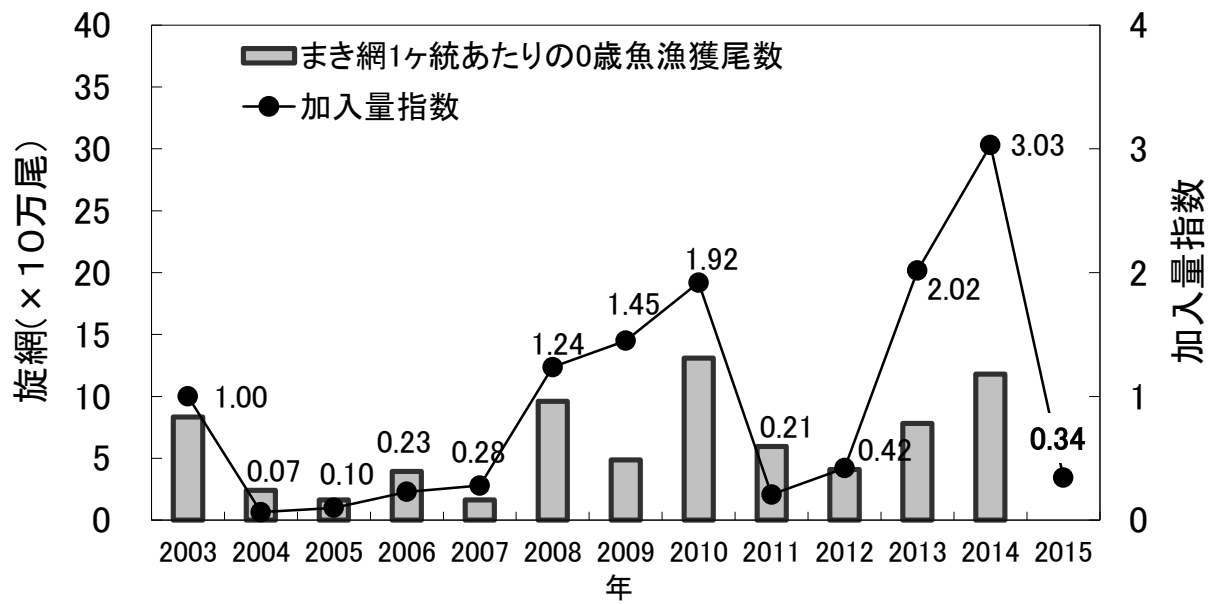


図5 日本海西部海域におけるマアジ加入量指数（2003年を1とした）とまき網1ヶ統あたりの0歳魚漁獲尾数の経年変化

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	京都府農林水産技術センター 海洋センター
秋田県水産振興センター	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
山形県水産試験場	鳥取県水産試験場
新潟県水産海洋研究所	島根県水産技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
石川県水産総合センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所
福井県水産試験場	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所